

やま だ とも き  
山 田 智 輝

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 427 号
学位授与年月日	平成25年3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
最終学歴	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 文化科学専攻
学位論文題目	<b>R̥gveda</b> における Sarasvatī の研究 —河川の女神の諸相—
論文審査委員	(主査) 教授 吉水清孝 教授 桜井宗信 教授 鈴木岩弓

## 論文内容の要旨

本論文は、古インド・アーリヤ語最古の文献であるリグヴェーダ (R̥gveda、以下 RV) を主要対象とし、そこに言及される河川の女神 Sarasvatī について、文献学的手法を用いて網羅的に考察を加えるものである。遊牧、移住生活時代にあった、若しくは往時の記憶を色濃く留めていた頃のインド・アーリヤ人によって伝承された宗教文献において、河川の神格としての Sarasvatī は如何なる存在として言及されるのか、個々の用例の精査に基づいてその全体像の解明を試みる。論文は全四章から成る。以下、各章ごとにその概要を示す。

### 第I章 序論

研究対象として扱う文献 RV 及び女神 Sarasvatī について、その概要を示した。まず RV に関して、文献成立の背景、文献内容の特徴を解説した。次いで Sarasvatī について、その概要及び研究史を概観し、さらにそれらを踏まえた上で、実在する河川としての Sarasvatī の所在地に関わる諸問題について、先行研究への言及を交えつつ、自身の解釈を提示した。概略は以下の通りである。

#### ・文献 RV

古インド・アーリヤ語(所謂サンスクリット)の中で最も古い段階の言語である「ヴェーダ語」によって伝承された宗教文献群を「ヴェーダ文献」と呼ぶが、RV は、それら一連のヴェーダ文献の中で最初に編集された文献である。内容としては、特定の神々に対して捧げられた「讃歌」を集成した韻文文献に位置づけられる。

RV は紀元前1200年頃、現在のパンジャブ地方周辺で編集・固定されたものと推定される。しかしながら文献が伝える世界の中心的な舞台となっているのは、往時のインド・アーリヤ人たちがその地域に至る以前に遊牧生活を営んでいた活動域、具体的には現在のアフガニスタン周辺の丘陵やステップ地帯である。遊牧・移住を主な生業としながらアフガニスタンからヒンドークシュ山脈東端のカーブル峠を通り、インドの地に到達するまでの記憶をかなり留めているという点が、この文献の大きな特徴の一つである。後続する他のヴェーダ文献が編集された頃には、生業形態は定住生活へとある程度移行が完了しており、移住生活そのものは事実上追憶の中の存在になっていたと考えられるのに対し、リグヴェーダではそのような古い時代の記憶の痕跡を、より具体的な形で記述の中に辿ることが可能であるという点で、他のヴェーダ文献とは明確に性格を異にする。



図 (GOTŌ, ENDO 制作)

#### ・ Sarasvatī の概要

*sārasvatī-* は文字通りには恐らく「池・湖 (*sāras-*) を持つ女 (形容詞の女性形)」を意味する。アラコースィア (Arachosia、現在のカンダハール地方) のイラン名、古ペルシア語 *Harauvatiš*、新アヴェスタ語 *haraxvaitī-* (アラコースィアの方言形を反映するものと推定) は同じ語に遡るものと思われる。

RV 中には、同女神に対し単独で捧げられた讃歌が三篇存在し、単語そのものは派生語も含め全74回言及される。同文献の中では、Sarasvatī は「特定の河川」及び「それを神格化した存在」として言及される。大量の水が流れる急流として明確に描写され、数多く登場する河川の中でも「最上の河川 (*nādītama-*)」として最大級の賞讃を受ける。この川の周辺地域はインドの地に到ったインド・アーリヤ人達にとっての最初の定住地としてイメージされ、今日に至るまでインド世界における謂わば「まほら」としての地位を有し続ける。

RV 以降の散文文献になると、祭式の文脈における重要性を増すものの、その一方で河川そのものの「消失」を示唆する表現 (*sarasvatyā vinaśana-* 「Sarasvatī の消え去る場所」) が断片的に見受けられるようになる。マハーバーラタでは、消失に関してより具体的な形で言及され、消失と再出を数度繰り返す

た後に、最終的に海へと注ぐことが述べられる。また河岸部には幾つもの聖地 (tīrtha) が点在するとされ、それらへの巡礼に関わる記述も伝えられる。

今日のヒンドゥー教においては、Sarasvatī は言葉の女神 Vāc と同一視され (この傾向は RV に後続する韻文文献の段階で示唆される)、学問、文芸、芸術を司る女神に位置付けられる。同時にブラフマー神の妃ともされ、ラクシュミーと並び女神として非常に高い人気を博し、広く信仰を集める。日本には仏教を経由して取り入れられ、「辯才 (財) 天」の名で知られ、財産や福德、技芸や学問を司る女神として全国各地で祭られている。

#### ・Sarasvatī 川の比定を巡る議論：ガッガル・ハークラー川

Sarasvatī に関する研究は、古くは19世紀から、今日に至るまで多数行われている。それらの研究史の中でも「Sarasvatī 川は今日のどの河川に比定されるか」という問題は特に研究者の関心を集めたが、今日ではガッガル・ハークラー川 (Ghaggar-Hakra、前者はインド側、後者はパキスタン側の呼称) に比定されるという見解が広く受け入れられている。

この川はインド・ハリヤーナー州、ラージャスターン州をパキスタン国境に向かって流れ、途中で砂漠に没する末無川である (場所については上掲の地図を参照)。かつてはさらに先まで流路が続いていたと考えられるが、その詳細なルートは未だ特定されていない。現在でも、地域によっては雨期に時折氾濫する程度の水量を有するものの、年間流量や周囲に形成される氾濫原は、インダス川やサトレジ川といったパンジャブの他の河川と比較するとかなり小規模である。旧河道を含め、ガッガル・ハークラー川周辺地域はインダス期の遺跡の密集地として知られるが、ハラッパー文明盛期 (紀元前2500-1900年頃) には同河川は既に現在と同規模であったことが、近年の研究により明らかになっている。また河水の供給は、他のパンジャブの河川とは異なり、ヒマラヤの雪解け水ではなく、専ら夏のモンスーンによって担われていたことも報告されている。

このガッガル・ハークラー川が Sarasvatī に比定されるという見解は、インドの伝統の中では古くから受け入れられているようである。しかしながらそれと同時に「インド・アーリヤの文化の黎明期において、この川は海まで注ぐ大河であった」とする考え方も、今日に至るまで広く受容されている。この概念がいつ頃定着したものなのかは不明であるが、上述したような、RV 中に見受けられる大河としてのイメージや、マハーバーラタの記述が歴史的な証左としてしばしば引用される。

上述したように、ガッガル・ハークラー川は遅くとも紀元前1900年代には既に現在と同規模の河川であったことが判明しており、紀元前1200年頃が想定される RV の年代に、大河としての Sarasvatī 川の実在を認めることは困難である。しかしながら、RV 等の文献を典拠とする、大河として描かれる Sarasvatī 川のイメージと、近年の地球物理学等の分野が提示するガッガル・ハークラー川の実像との間のギャップは、RV が持つ文献上の特性によって説明できるものと思われる。

冒頭でも述べたが、RV という文献は、神々に対して捧げられた「讃歌」を集成したものである。またその伝承の背景には、遊牧を生業としていた頃の記憶を依然として強く残す時代のインド・アーリヤ人達によって編集されたという事情がある。よってこの文献を根拠に、地誌や地理に関する情報を求める際には、今日我々が想像するそれらとの間に、ある程度の隔たりを予め想定する必要があると言える。

具体的に言えば、RV が「讃歌の集成」である以上、たとえ実際には小河川であっても、誇張的に大河として描写される可能性が考えられ、また「最上の河川」等の表現についても、一概に物理的に大きな河川を指すとは限らず、生活拠点としての優位性を述べるものとも解釈され得る。

また RV という文献に、往時の記憶が反映されているが故に、移動の過程で出会った追憶の中にある

河川（具体的にはパンジャブ以西の地域の河川）の残影が、ガッガル・ハークラ川としての Sarasvatī 川のイメージに集約されているということも考えられよう。

こういった点から見れば、ガッガル・ハークラ川は、インド・アーリヤ人達が移住の末に辿り着いた「終着点としての Sarasvatī 川」と言い換えることができるかもしれない。他方、その後のインド世界に目を向けるのなら、同河川は「歴史の出発点」であるとも言える。

## 第Ⅱ章 各論

RV における Sarasvatī の全用例に関わる網羅的な分析を前提に、各々の用例から看取される同女神の特徴について9つの着眼点を設定し、それぞれを掘り下げて分析した。各項目の概要を以下に提示する。

### 1. Sarasvatī 川

RV における Sarasvatī の最大の特徴である、河川としてのイメージを具体的に描き出す箇所について、「河川としての姿を伝える用例」及び「他の河川と共に現れる用例」の二通りの大別を設け、各々について考察した。

Sarasvatī 川は山岳地帯を流れ、大量の水を流す急流として描写される。その河岸部には放牧地が形成されていたことが示唆され、家畜を養うために必要不可欠な水や牧草地を人々に齎す理想的な河川であったことが読み取れる。詩人達はそのような Sarasvatī に対し、他の諸々の河川を上回る「最高の河川」としての地位を与えて賛辞を呈する。

また Sarasvatī は Sindhu、Sarayu、Dṛṣadvatī といった他の河川とも並列して度々言及される。それらの用例からは現在のガッガル・ハークラ川と重なる位置にあることが示唆されるものもあるが、それと同時にパンジャブ以西の河川を暗示するものとも解釈可能な用例も確認される。

### 2. Sarasvatī と人間達

Sarasvatī と共に言及される人間に着目し、「王侯、部族」、「敵対者」そして「祭官、詩人」の三種のカテゴリーを設けて用例を分析し、諸河川の中でも最も理想的な存在として意識される Sarasvatī 川を巡る、人々の営みについて考察した。

Sarasvatī と共に現れる人々に着目すると、まずは戦の場面を描写する文脈の中に言及される傾向が見て取れる。基本的な対立構造はインド・アーリヤの部族対非インド・アーリヤの部族という形態であるが、中にはインド・アーリヤ系の部族同士の対立を暗示するものも存在する。これらの抗争の背景には、先の節で概観したような Sarasvatī 川の水源地や牧草地を巡る利権争いがあるものと推察される。他方、闘争以外に関する文脈中では、特に Sarasvatī に対し繁栄を求める詩人の意図が多く看取され、この土地に対する人々の強い思い入れが窺える。

また、敵対する異部族については、インド・アーリヤ人達が保持していなかったであろう「先進技術」との繋がりも暗示され、そういった技術力を持つ異部族がこの河川付近に居を構えていた可能性が考えられる。

### 3. Sarasvatī と男性神達

女神 Sarasvatī はしばしば他の神格と並列して登場するが、それらの用例の多くが、諸神格の名前が羅列される中に、Sarasvatī の名が言及される類いのものである。本節では、そういった一連の用例の中でも、特に Sarasvatī との関連性が見出される男性の神格について扱った。

特筆すべき関連性が見出される男性の神格としては、Pūṣan（家畜の群れを守る神格。道の守護者としての側面も有する。ギリシアの神「パーン（Πάν）」は共通の語に遡る）、Marut 達（若い美少年の一団として描かれる神。モンスーンの雷雨を象徴する）、Indra（RV で最も人気のある英雄神）、Sarasvant（Sarasvatī の男性形の対応神格）が挙げられる。

Marut 達と Sarasvatī については、「モンスーンの降雨と河水の増大」という自然現象に両者の繋がり  
の根底にあるイメージを見出すことができる。他方、Pūṣan 及び Indra との関係性においては、それぞれ特定の概念や神話の寓意が看取されるものの、RV の限定的な記述からそれらの原型を具体的に推断することは容易ではない。Sarasvant については、名称以外にも Sarasvatī と共通点が複数見出されるが、その一方で Sarasvant は「火神 Agni の水中における誕生」や、「Apām Napāt（「水たちの孫」の意。Agni の水中での姿を象徴する存在とされる）」に関する伝承とも何らかの概念を共有している可能性が見出される。

#### 4. Sarasvatī と女神達

Sarasvatī と共に言及される「Rākā、Sinīvālī、Guṅgū」及び「Bṛhaddivā」という、いずれも RV における用例数が限定されるマイナーな女神について論じた。

Sarasvatī は Rākā、Sinīvālī、Guṅgū の三者と共に「神々の姉妹」や「Indra の妻」として言及される。Rākā は針仕事に長じた女神、Sinīvālī は多産を司る女神としての特徴がそれぞれ見出され、実在の女性の姿や役割が反映された女神として意図されていることが読み取れる（Guṅgū は用例数の制約上、素性を窺い知ることは難しい）。特に Sinīvālī に関しては、名称も併せて慮ると、非インド・アーリヤの女神である可能性が想定され、河川付近を生活の場とする先住民が信仰していた女神の存在が想起される。こういった女神達が RV の主要な女神である Sarasvatī と共に並置されて「神々の姉妹」等と呼ばれることから、他部族の神格とヴェーダの神格との融和を試みる意図が示唆されているものと思われる。

他方 Sarasvatī は Bṛhaddivā という存在と共に言及されるが、この語については、特定の女神の名を指すとも、女神等に対して用いられる形容詞とも解釈でき、一義的な結論の提示は容易ではない。個々の用例の精査からは、女性達を引き連れる Tvaṣṭṛ（生物を形作るとされる神。手工業者の姿で描写される）と Ṛbhū 三神（高い技術力を持つ工芸神。Ṛbhukṣan、Vāja、Vibhvan の三者で構成される）の対立に纏わる神話、さらには人間の王 Purūravas と水の精 Urvaśī との恋愛を巡る物語との関連性を指摘し得る。いずれの事例においても、非インド・アーリヤと思しき女性達との結び付きも同時に暗示され、上述の女神の例のような河川付近の異部族の共同体に帰属する女性達、さらにはそのメタファーとしての「水たち（āpas、生きている女性達の姿で描かれる。物質としての水、udān-、udakā- とは完全に別の存在として意識される）」を巡る何らかの概念の存在が僅かに見出される。

#### 5. Sarasvatī と思慮、言葉

Sarasvatī が有する精神的事項との結びつきについて、「思慮（dhī-、RV の讃歌を詩作するためのインスピレーション）」及び「言葉（vāc-、RV の讃歌を構成する要素）」の二語に着目して論じた。

Sarasvatī は「思慮」を司る女神としてしばしば言及されるが、両者の関連の根底には、理想的な土地と見なされる Sarasvatī 河岸部が祭式や抗争の舞台にもなったため、詩人達の活躍の場としての性格を有していたという、歴史的背景の存在があるものと思われる。

その一方で、後代（Atharvaveda 以降）になって明確に打ち出される「言葉」との同一視は、RV の段

階では殆ど見出されない。Sarasvatīと「言葉」との繋がり、は、「水たち」を介した関連性の中に見出される可能性がある。これらの一連の関連性は「水音」のイメージに集約されるものとも解釈できるが、その一方で「女性名詞」としての各語の背後に、何らかの共通概念の存在も想定され得る。

## 6. 物質的豊かさを齎す Sarasvatī

Sarasvatīはしばしば「財、富 (*rayi-*)」、「懸賞 (*vāja-*)」、「良いもの／道具 (*vāsu-*)」、「宝 (*rātna-*)」等の物質的な豊かさに関わる語句と共に言及される。この背景の一つには、水や牧草地を供給するという、同女神が河川として齎す恵みに基づく連想が指摘できる。また敵対部族との抗争における勝利によって獲得される戦利品のイメージも、同時に重ね合わされる。ただし、この特徴はSarasvatīに固有のものではなく、Indraをはじめとする他の様々な神格にも見出される。

## 7. Sarasvatīと乳牛

遊牧を生活の中心に据えていた往時のインド・アーリヤ人達にとって、牛、羊、山羊等の家畜の存在は、生活基盤を形成する「財産」に他ならない。それら諸々の家畜たちの中でも牛は殊に特別な存在として意識されていた。牛そのものが大きな関心事であったことを示唆する記述はRVの随所に見受けられるが、それ以外にも神々を讃えるためのレトリックとしても、牛に関わる語句は多用される。

Sarasvatīもその例外に漏れず、女性名詞であるために「乳牛」の姿でしばしば描写される。そしてそのような乳牛としてのSarasvatīは「ミルク」という形で、様々な恩恵を人々齎すことが述べられる。この特徴は、諸々の家畜の安定的な生育、さらにはその上に築かれる一族の繁栄と密接に結び付く河川という存在の重要性を反映するものと解釈できる。

## 8. Āprī讃歌におけるSarasvatī：三女神

本節では、Sarasvatīの祭式の文脈における特徴として、Āprī讃歌に言及される用例について扱った。*āprī-*の語義は恐らく「喜ばせて／満足させて、自らの元に引き入れる」である。Āprī讃歌は主に11の詩節で構成されており（一部12及び13詩節からなるものも存在する）、動物犠牲祭 (*paśubandhā-*) における11の前献供 (*prajāyā-*) の際の献供詩節 (*yājyā-*) として用いられる。

SarasvatīはĀprī讃歌中の第8乃至9詩節に登場するが、その際Idā（「元気づけ、滋養」が原義。バターオイルを神格化した存在に位置づけられる）とBhārātī（「Bharata族の女」が原義。Bharata族によって執り行われる祭式を神格化したものと解されることが多い。Hōtrā-「注ぎ込み献供」という別名を以て謂われることもある）という他の二種の女神達と併せて「三女神 (*tisrō devīh*)」として扱われる。なお、箇所によっては各女神の名称が直接言及されないこともあるが、いずれの用例においても「三つ組の女神」という構造は一貫して維持される。

Āprī讃歌におけるこれら「三女神」の役割や位置づけについて解き明かすことは容易ではないが、三者の名称について、表面上の語義のみを拾い上げて解釈するのなら、「河川の水 (Sarasvatī) へのバターオイル (Idā) の注ぎ込み献供 (Hōtrā Bhārātī)」といった形の儀礼 (Apām Napātに関する儀礼がこの形式を中心に執り行われる) との間に関連性を見出すことができるかもしれない。

## 9. 葬礼讃歌におけるSarasvatī

RV X 10-19には葬送儀礼に関する一連の讃歌が収録されているが、ここではそれらの中のSarasvatīが言及される一節について扱った。一連の葬礼讃歌中のX 17 7-9において、Sarasvatīは、Pūṣanに捧げ

られる詩節（同3-5）に後続する形で言及される。道を守護する神である Pūṣan と河川の女神 Sarasvatī が葬送の文脈で共に語られることから、他の葬礼讃歌に暗示される「死者が通る道と河川・水流」との関連性が想起される。

### 第三章 資料編

本章では、RV における Sarasvatī が言及される全用例について、解説及び脚注を付した形で提示した。RV 中に三篇伝承される Sarasvatī 讃歌を冒頭にて扱い、その後、他の全ての用例を章ごとに順立てて掲載した。基本的に Sarasvatī という語が現れる讃歌及び詩節のみを掲載した。しかし、河川付近で勃発した部族間大抗争の様子を伝える十王戦争の歌（VII 18）や、詩人 Viśvāmitra と河川との対話讃歌（III 33）は、Sarasvatī の名前は直接言及されないものの、往時の河川観の理解に資すると判断したため、本章にその全容を掲載した。

### 第四章 結論

最後に、これまでの内容を総括すると共に、そこから新たに浮き彫りになる問題点、そして本研究に続くであろう新たな研究課題について、その方向性を提示した。

Sarasvatī を巡る諸々の特徴の基底を成す性質は、河川としてのそれ集約される。同河川は他の様々な河川と並列して語られるが、それらを凌駕する最高の河川として、詩人達から数々の賞賛を受け、水や牧草地といった、遊牧生活を営む人々にとって必要不可欠な物資を提供する理想的な土地として強く意識される。こういった点は、Sarasvatī の物質的恩恵を齎す女神としての側面や、たくさんのミルクを出す牝牛の姿を用いた比喩表現からも窺い知ることができる。

これらの河川としての具体的なイメージは、モンスーン依存型というガッガル・ハークラ川モデルに符合するものも一部あるが、その一方で山岳地帯を流れる点や、西方の河川と並置される点については、パンジャーブ以西の河川像に相当するとも言える。VI 61に伝わる Sarasvatī に対して単独で捧げられた讃歌は、そういった Sarasvatī 川の時代と場所を越えたイメージの総括を伝えるものとも解釈できる。

上記のような Sarasvatī 川の周辺地域は、言うまでもなく地理的な重要性を以て人々に意識されるが、その重要性故に時として競合の対象となっていた。この争いは、移住を繰り返していた詩人達の一団と、河川付近に盤踞していた非インド・アーリヤ系の先住部族との間で主に繰り広げられていたようであるが、インド・アーリヤの部族同士の抗争の存在も断片的に示唆される。また敵対する部族の一部は、往時のインド・アーリヤ人達が保持していなかった先進技術を持ち合わせていたことも暗示され、そういった河岸部の異部族との接触は、時として詩人達の一団に利器や技術の類を齎したとも推察される。

また Sarasvatī は男女を問わず様々な神格と同時に言及されるが、それらの中でも特にマイナーな女神達との関連付けられる傾向が顕著に見受けられる。これらの存在を巡る一連の記述からは、河川付近を生活圏としていた非インド・アーリヤの部族の女神や、そういった共同体に帰属する女性達の姿が垣間見られる。

女神としての Sarasvatī は、RV の個々の讃歌を構成する言葉 (*vāc-*) を生み出すための元種に相当する「思慮 (*dhi*)」を司る者としても度々描かれる。このイメージは、恐らく Sarasvatī 川が生活上の種々の関心事と深い結びつきを持っていたため、詩作を要する機会に富んでいたことに起因する。また、祭式の文脈においては、Āprī 讃歌及び第 X 巻の葬送儀礼に関する讃歌の二つにおいて登場する。前者に関して Sarasvatī は、Idā 及び Bhārati という名の女神と合わせて「三人の女神」として扱われる。後者

に関しては、葬送儀礼を扱った一連の讃歌の中の一節において、道を司る神 Pūṣan に捧げられる詩節に後続する形で言及される。これらには、恐らく祭式と河川、さらには河川の構成要素としての「水たち (āpas)」との関わりを巡る概念が背後にあるものと思われる。特に後者に関しては死後の道や河川・水流に関わる観念の存在が思い起こされるが、いずれの文脈においても、その思想的背景や各々の神格が果たす機能について具体的な見解を得るためには、各祭式全体に亙る子細な研究が求められる。

本研究は RV における代表的な河川、そしてそれを神格化した女神の類型の一つを浮き彫りにした。本研究によって得られた知見を踏まえて、さらに他の河川を巡る一連の伝承を精査すれば、インド・アーリヤ人の河川観の包括的解明が見込まれる。特に *sīndhu-* (インダス川。河川一般を指す普通名詞としても用いられる) や *samudrā-* (海、湖、大水) といった *Sarasvatī* を大きく上回る用例数を有する対象については、語義そのものの検討をも視野に入れながら総体を考察することが求められるが、実在の自然物としての河川や海に限らず、思想や宇宙観の中でそういった事物が担う役割を理解する上でも貴重な情報が得られる可能性が高い。

他方 RV 以降のヴェーダ文献に目を向けると、マントラやブラーフマナにおいても *Sarasvatī* は引き続き重要性を保ち続ける。そこでは河川そのものの消失や、言葉 (*vāc-*) との同一視等、RV の段階では見受けられなかった新たな側面が打ち出されるようになる。こういった後の文献における同女神の諸相、そして祭式におけるその役割を明らかにすることは、ヴェーダ文献の理解に際し、重要な意味合いを持つだろう。これらの概念はさらに後代の文献へと受け継がれ、今日においてもなお生き続ける *Sarasvatī*、辨財天の信仰へと繋っていく。

## 論文審査結果の要旨

インド最古の文献である讃歌集リグヴェーダに歌われた女神サラスヴァティー (*Sarasvatī*) は、日本でも弁才天 (弁財天) として信仰されるが、その社が水辺に建てられるのは、もとの *Sarasvatī* が川の女神であることに由来する。この *Sarasvatī* は、実在する川としては、パキスタン国境近くを流れ砂漠に消えるガッカル・ハークラー川に比定されている。本論文は、第 I 章総論において先行研究を概観し、第 II 章各論において、リグヴェーダ内での *Sarasvatī* に関連する全ての詩節を文献学的に精査し、リグヴェーダにおける *Sarasvatī* の全体的特質を以下のように解明した。

*Sarasvatī* は、並列される他の河川名からしても、現在のガッカル・ハークラー川の位置に重なるけれども、この川が、実際には平地の河川であるにもかかわらず、山岳地域の大溪流のように讃えられるのは、遙か西方から進入して定住した、アーリヤ人の遊牧民としての民族的追憶を反映すると考えられる。また *Sarasvatī* をめぐってアーリヤ人部族、敵対する部族、武人を支える祭官と詩人たちが数多く歌われ、*Sarasvatī* は先住民が崇拝したと見なしうる非サンスクリット語名の女神たちや、アーリヤ人部族に仕えた非アーリヤ系技術者の神々をも伴うことから、この地域が、様々な人々が暮らす重要な生活圏であったことがうかがわれる。さらに詩人は、*Sarasvatī* に、放牧中の家畜の群れを守り思慮を鼓舞する神プーシャンを伴わせて、洞察を高め危険を避けることを祈願する。また *Sarasvatī* を雷雨の神群マルトの同僚と呼んで、モンスーンの到来で川が増水することによる豊穡への期待を歌い、さらに *Sarasvatī* の語形を男性形にした *Sarasvant* を、膨らんだ乳房もつ男性神とみなして、子孫繁栄の神として讃える。リグヴェーダの段階では、*Sarasvatī* と言葉の女神 (*Vāc*) との繋がりは明確でないが、*Sarasvatī* が思慮



深さを備え、また豊穡をもたらす女神であることを数多くの詩が讃えている。特に祭式儀礼との関係において、Sarasvatīが、動物犠牲祭で朗誦するアープリー讃歌の中で、アーリヤ人に富を与える三女神のひとつとされており、さらに葬送儀礼で朗誦する讃歌の中では、旅路の安全を司る神プーシャンを伴い、死者を導きその穢れを清める女神として讃えられている。さらに本論文は第Ⅲ章資料編において、リグヴェーダ内に三つあるSarasvatī讃歌と、その他のSarasvatīに関する全詩節を訳出し注記を加えている。

本論文によって、日本でのSarasvatīが「弁才天」と「弁財天」の二通りで表記され、知性の神と富の神の両面を兼ねている由来が、よどみなく流れ流域に豊穡をもたらす川にリグヴェーダ詩人たちが託した詩想にまで遡ることが立証された。よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。